

# サムボーとその著作『牧業者への助言』

——モンゴルにおける遊牧生活を中心に——

烏 仁 其 其 格

## は じ め に

モンゴルは20世紀の百年間において、全く性格の異なる社会体制を経験する。1911年に中華帝国清朝の支配から離脱したあと、約70年間社会主義体制のモンゴル人民共和国（1924-1992年。以下人民共和国と略す）時期を経て、21世紀の現在は民主主義国家のモンゴル国へと変貌している。

こうした社会体制の劇的変化が、遊牧を特徴とするモンゴルの牧畜業に大きな影響を及ぼすことになる。社会主義体制が確立された当初、遊牧はモンゴルの唯一の経済部門であった。人口の90%以上が遊牧に従事し、国民所得のほとんどが遊牧から得られていた。政府は伝統的な遊牧をそのまま継承し、遊牧支援政策を講じる。1950年代末になると、遊牧は国民所得の約60%を提供し、モンゴルの社会経済を支えていた。59年には牧畜業の集団化が実施され、遊牧が国の指導によって推進されるようになる。一方、1930年代からはじまったソ連の援助によるモンゴルの工業化が促進され、商業、軽工業、交通などの産業が急速に伸長してゆく。70年代に入ると、工業は牧畜業に替り、GDPの1位となった。遊牧経済が国内総生産に占める比率は低下し、1990年には15%となった。しかし、90年代初め、民主

---

\* 内蒙古大学蒙古学学院

キーワード：Sambuu, 牧民, 知識伝授, 放牧技術, 家畜管理

化実現による社会経済が混乱するなか、その比率は伸長し、1997年に37%にも達する (*Mongyol ulus-un statistiy-un emkidkel* 1998:126。この資料は毎年行われるモンゴル国勢調査の結果として刊行される統計集である。以下「統計集」と略す)。それ以降、遊牧の国内総生産に占める比率は低下する傾向があるものの、2006-2010年までは平均17.5%を保っていた(同前 2012b:62)。2011年の統計によると、いまだ遊牧は国内総生産の約12.3%を産出し(同前)、なお基本産業の位置を占め続けている。

家畜総数は社会主義時期において2300万頭前後の一定した状態を保持していた。民主化以降は急増し、2007年に4000万頭を突破したのだが(同前 2008:119)、2011年には3600万頭まで落ち込んでいる(同前 2012a:208)。2012年6月の統計公報によると、今年は1333万頭の子畜を育成し、前年同期に比べ、79万頭増えている(同前 2012c:28)。

また家畜の世話をする遊牧民(一般的に「牧民」にあたる *malčín* と呼ばれる場合が多いが、以下牧民と略す)の数も著しく変化する。社会主義体制下では工業、商業などの産業が推進されるにつれて、人口が都市に集中し、地方人口は減少した。特に牧民は1960年の19万人から1990年の14万人まで減った。体制移行後、牧民の数が増え、1997年に41万に達する(同前 1998:150)。それ以後は減少するものの、2008年に36万となった(同前 2008:213)。2011年の統計によると、牧民は31万人余りを数え、全国労働者103万人の33%を占めている(同前 2012a:117。2011年に全国人口は281万だった)。

モンゴルの遊牧は五畜、すなわちウマ、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ラクダを対象として、モンゴル高原の自然環境に適応して展開されている。牧民は五畜の群を連れ、牧草と水、および家畜に必要な塩分などを得られる放牧地をめぐり、四季に応じて暮らす場所を移動させながら生活している。五畜の肉、乳、毛、皮革、タテガミ、血液、骨、糞など、およそ考えられる

## サムボーとその著作『牧業者への助言』

すべてのものが、原材料として牧民の衣・食・住生活に徹底的に利用される。さらに季節に応じた移動には、ウマ、ウシ、ラクダが騎乗、荷車曳き、荷駄積みなどに使用される。それによって牧民の生活需要がほぼ満たされている。したがって遊牧生活のほとんどが、家畜に依存しているといっても過言ではない。牧民は一定数の五畜を保有し、自然環境、季節変化、地域差に応じて、さまざまな工夫を施し、五畜の放牧・管理に当たり、自分の生活生産を立てているのである。

モンゴルは海から遠く離れた内陸アジアのほぼ中央部で、平均標高1500メートルのモンゴル高原に位置し、典型的な大陸性気候を有している。冬は寒くて長く、夏は暑くて短い。降水量が少なく、平均年間200ミリで、しかも夏に集中する。年間、昼夜の温度変動が激しく、半年近くが0℃以下の寒冷地である。過酷ともいえる厳しい自然のなか、複雑な遊牧生活を維持してゆく必要から、モンゴル遊牧民の間では、遊牧生活を営むための知識や技術を重んじて後世へ伝えようとする伝統があった。たとえば、19世紀半ばに遊牧生活の教訓書として『ト・ワンの教え』という文書が作られたことが知られている。封建領主ト・ワン（1797-1868）は自ら『ト・ワンの教え』を著することによって、領内（現在のモンゴル国ドルノド県内）のあらゆる資源を利用し、新しい産業を開発し、さらに牧民へ遊牧の技術を普及し、生活生産を立て直そうとしたと評価されている（小貫 1993：59）。上記文書については、その出現、背景、意義、さらにその著者であるト・ワンに関する研究が相当の成果を挙げている（小貫 1993、岡 1997、萩原 1999）。そして1945年に人民共和国ではサムボー（1895-1972）によって『牧業者への助言』という著作が出される。同書は第2次世界大戦中、人民共和国がソ連への全面的な援助を決定し、戦争需要を満たすため牧民を技術面から指導し、牧畜業をいっそう発展させようとした状況に出現したのである。この2つの著作は、時期的に約1世紀も離れて

はいるが、それぞれ封建、社会主義という全く異なる社会体制のもと、遊牧の伝統的なやり方にもとづき、牧民の生産意欲を刺激し、牧畜業の発展をはかろうとした共通点を有しているのである。

サムボーは優れた政治家と評価されているが、もともと牧民で、幼い頃から約20余年間遊牧現場で家畜放牧をはじめとする遊牧の多岐にわたる知識を体得した。彼は1930年からトゥブと、エムヌゴビ両県（モンゴル国の行政区域は日本の県にあたるアイマグ ayimay と、郡に当たるソム sumu がある。以下県、郡とそれぞれ訳す）知事、駐在ソ連大使、外務省代理大臣を経て、54年から6期連続で人民大会幹部会議長<sup>1)</sup>を務める。そのかわり、遊牧の知識や技術を書きとどめ、代表作『牧業者への助言』をはじめとする多くの著書を残した。全国から多くの優秀牧民が招請され、遊牧の模範となる知識や技術について討論された際、サムボーは熟練した牧民たちの優れた経験、やり方を参照し、さらに自分自身が持つ伝統的な遊牧の知識を活かしながら、『牧業者への助言』を完成させたのである。

民主化以降、遊牧現場では新たに牧民となる者が増え、家畜頭数も急増したのだが、1999-2001年にかけて連続して発生した自然災害をきっかけとして、家畜大量斃死、災害への対処の失敗、牧民の経験不足、放牧地荒廃、過放牧など、多くの問題に直面することになる。2001年当時首相だったエンフバヤル（1958-、大統領在任 2005-2009年）からは、モンゴルが生き残るためには遊牧を捨てなければならないという発言まで出された（*Far Eastern Economic Review*, 2001.5.31:30）。その発言からもこの時の被害がいかに深刻なものだったかが窺われる。しかし牧民は住居ごと移動し、五畜を世話する伝統的な生活様式を原則として続け、社会変化に対応している。約32万人の牧民が3600万頭の家畜を飼養する現状を考えるうえで、サムボーの遊牧現場での経験は、現実的な意味があるではないかと思われる。

## サムボーとその著作『牧業者への助言』

本稿は、まず政治家としてのサムボーの略歴を述べ、彼の著作『牧業者への助言』を紹介する。つぎにサムボーの牧民時代の伝記にもとづき、彼が一人前の牧民へと成長していった過程を分析し、モンゴル遊牧民が遊牧の多岐にわたる知識や技術をどのように体得していったのか、を明らかにする。

### 1 政治家としてのサムボー

まずサムボーの略歴を見てみよう。ザムサランノ・サムボー（Jamsaran-u Sambuu。モンゴルでは父親の名前のザムサランと、サムボーという息子の名前をあわせて命名する。J・サムボーと略する場合が多いが、以下サムボーと略す）は1895年6月27日、清朝のトシェート・ハン盟ゴビ・トシヤ・グン旗<sup>2)</sup>（現在のモンゴル国トゥブ県ブレン郡）の貧しい牧民の家庭に生まれ、幼少期を清朝崩壊、活仏君主制政権成立など、政局が激動するなかで過ごした。青年期には大蔵省の下級役人となる。

1930年から31年にかけてサムボーは、トゥブとエムヌゴビ両県が新たに設置されるにあたって、自分の出身地であるトゥブ県の初代県知事に任命された。彼が人民大会幹部会議長だった時期には、トゥブ県を何度も視察し、県創立40周年記念活動に参加するなど、トゥブ県との深い関わりが窺われる。1995年には当県庁所在地のゾーン・モド市でサムボーの生誕100周年記念活動が開催され、「サムボーはわが県の誇りである」とトゥブ県指導者がサムボーの事業を評価した（Sükebayatur 2003：206）。

1934年にサムボーは牧農省部長を務め、ソ連の援助による草刈りステーションが設置されるのに関わった。

1937年から46年までサムボーは、駐在ソ連大使として派遣され、ソ連との間で留学生派遣、研究者招請、貿易などの活動を展開させた（Sambuu 1970：18）。*Ünen* 紙<sup>3)</sup>には両国の軍事、政治、財政、文化のあらゆる面に

おける共同活動を拡大させるため、サムボーが大いに努力していたと記されている (*Ünen* 1972/5/23)。サムボーが駐在ソ連大使を務めた10年間は、人民共和国とソ連との関係がいっそう強まった時代でもあった。この時期におけるサムボーの活躍が両国の友好関係のさらなる発展に貢献したとソ連政府に評価され、1960年にはソ連政府最高レーニン賞が授与された(同前 5/25b)。さらに人民共和国の優れた政治家として、1975年版のソ連大百科事典ではサムボーの写真入りの紹介がなされている (*Большая советская энциклопедия* 1975・22: 531-532)。人民共和国においても「サムボーは、モンゴル人民共和国の独立を強固に主張し、モンゴルとソ連両国民の友好関係をさらに強化した」と評価され、1945年に金星勲章を授与したことが記されている (*Ünen* 1972/5/25a)。

そのあとサムボーは、駐在朝鮮民主主義人民共和国大使(1950-51)、外務省代理大臣(1951-54)を経て、1954年から6期連続で人民大会幹部会議長を務めて幅広く活動した(附録2参照)。彼は毎月1回の割合でモンゴル人民革命党大会、中央委総会、及び人民大会選挙会など、さまざまな会議に出席したり、発言したりした。また各県を視察し、各県の人民大会や党大会に参加した。ほかに建築、消費、婦人、検察、裁判などの部門と関わり、さらに外国への訪問、モンゴルへの訪問者の接待にも携わっていた。このように人民大会幹部会議長の役職は国民経済、文化の多様な部門に関わる幅広さを持つが、この役職は、政治的には象徴的な意味が強く、実権を伴わない。しかし形式上は社会主義国家体制特有の不可欠な地位である。

社会主義時代において、サムボーはモンゴル革命、社会主義建設のため多年にわたってたゆまず尽力した老輩功臣の一人だと評価されている(同前)。民主化以降も彼に対する評価は高い。2000年版の『モンゴル大百科事典』にはサムボーの事跡が載せられ、また『20世紀モンゴルの政治社会

## サムボーとその著作『牧業者への助言』

の功臣』にも彼の写真入りの略歴が紹介されている（Bolodbayatur 2004：246）。2007年にはモンゴル国・社会の優れた功労者としてサムボーの像がウランバートル市で新たに立てられた（*Ünen* 2007/11/No40）。碑文にはモンゴル人民革命党元書記長ツェデンバル（1915-91）と、モンゴル国初代大統領オチルバト（1942- 1990-97年在任）との思い出が書かれている。さらにスフバートルによってサムボーの研究が進められるようになり、サムボーは *Mongyol törö-yin mergen ebüge*（モンゴル政権の聡明な老翁）と称されている（Sükebayatur 2003）。

上記したように政治家としてのサムボーは高い評価を得ているのであるが、同時に彼の牧畜業に対する貢献も評価されている。人民共和国時代はもちろん、民主化以降も「国民経済の重要な部門である牧畜業に関する伝統的な知識が伝承されるのに重要な仕事をし、2世代の牧畜業技術者を育成した」と大統領バガバンデイ（1950- 1997-2005年在任）が指摘している（同前 2003：8）。

サムボーは、1923年からほとんど遊牧現場を離れるが、その後も政府のさまざまな役職に就きながら遊牧に特別な関心を持ち続けた。人民大会幹部会議長だった時期には、遊牧に対して深く注意を払い、牧畜業に関する会議には事情の許す限り出席していた。優秀牧民全国第4回大会（1955）、牧畜業先進青年第1回集会（1958）、農牧経済大学卒業式（1963）、「家畜の放牧はすばらしいことである」ゴビ・アルタイ県宣伝集会（1968）など、多くの会議や活動（附録2参照）に参加し、遊牧の知識や技術を宣伝し、若い世代へ伝えようとした。

またサムボーは役職のかたわら、自分が今まで蓄積してきた遊牧生活知恵や放牧技術を書きとどめるように努力した。エムヌゴビ県在任中には、その地の自然環境、牧草種類、さらにどの牧草がどの種の家畜に好まれるのかを詳しく調べ、早くも1935年にはゴビ地域の植物について *Arad-un*

*negüdel-ün mal aju aqui-yi sayijirayulun kögjäölkü aradçilaltu arı-a mayıy-un sedüb*（牧民の遊牧経済の改善をめぐる民主的なやり方を課題として）を著した。37年には *Malčid-un tursily-a*（牧民の経験）、駐在ソ連大使だった45年には『牧業者への助言』をそれぞれ完成させた。56年には *Malčid-tu ögkü jöblelge*（牧民への提案）が出版され、英語とロシア語の翻訳もなされている。これらの著作は価値のある本とされ、現在も牧民に愛用されている。サムボーの遊牧に関する論文や発言の一部分は *Uqayulaqu tutum uqayaran-a*（宣伝すればするほど見識が広まる）に収められ、2005年に出版された。『牧業者への助言』は1987、2001年にそれぞれ再版され、モンゴル遊牧民の間で *Sambuu-yin boro nom*（サムボーの褐色の本）と親しまれ（*Sambuu* 2005：436）、好評を博している。政府の遊牧保護施策のもと、遊牧を営む知識や技術が同書を通じて牧民の間でかなり普及したことが推測できる。

特に2001年再版の意義については、「モンゴル国になって、牧畜業に従事する人口の構成には大きな変化が現れ、若い牧民がたくさん加わった。彼らは、遊牧の伝統的なやり方、経験を十分に身につけていないため、牧畜業現場において極めて大きな過失を起こして深刻な被害を受けた」（同前 2001：10）というように、若い牧民には遊牧の知識や技術が欠如していることを記し、それが1999-2001年にかけての自然災害による被害を拡大させた一原因として捉えている。牧民の育成をはかることが急務であるという目的が窺われ、伝統的な遊牧のやり方を見直そうとしていることが分かる。

モンゴル国元農牧省大臣ナランザルガル（2000-2003年在任）は「サムボーが長きにわたって蓄積された知識を収集して著書として残したのは、モンゴルの伝統的な文化財産が伝承されるのに重要な役割を果たした」と語っている（同前）。2002年にはサムボーの名前で命名された「J・サム



## サムボーとその著作『牧業者への助言』

ボー基金」という牧民を支援する組織が設立され、彼の息子スルンザブが代表として、父親の事業を受け継いで発展させようと努めている。

社会主義から政治体制が激変したプロセスにおいて、サムボーの貢献の大きさに対する評価は、大きく変わることなく受け継がれている。政府の牧畜業重視という方針がサムボーを通じて、多くの牧民へと伝わったと指摘できよう。

## 2 『牧業者への助言』の解題

前章において、政治家サムボーと遊牧の関わりを検討したが、つぎにサムボーにこのような評判をもたらした『牧業者への助言』について紹介し、モンゴル遊牧生活の有様を見てみよう。

『牧業者への助言』のモンゴル語原題は *Mal aju aqui deger-e-ben yarakiju ajillaqu tuqai arad-tu ögküü sanaγuly-a suryal* であり、「牧畜経済においてどのように働くのかについて牧民に与える助言」と直訳される。この著作はラティモアによって『牧業者への助言』と称して紹介された（ラティモア 1966：50。本稿もその呼称に従う）。

同書は本稿に取り上げた1945年初版のほか、社会主義時代の1987年と、民主化以降の2001年にそれぞれ再版されている。初版はウイグル式モンゴル文字で書かれ、19章からなり、383頁ある。写真資料47枚と、30种植物の色刷りの図が載せられている。他の版はキリル文字で出版された。1987年版は初版と同じく19章からなり、152頁ある。47枚の写真資料は省略された。2001年版も同じく19章からなり、171頁ある。写真資料はそのまま載せられたものの、6枚が省略されている。植物色刷りの図は白黒にされた。表に挙げていた60种植物は学名を改めて加えられた（Sambuu 2001：27-32）。

2種の再版では題目、章立て、項目の書き出しはほとんど変わらない。

ただ目次の書き出しの部分では、初版と1987年版が完全に一致しているが、2001年版では第1-18章まで一致し、第19章の家畜の病気についての部分は、各種病気の名を目次に項目として書き出している（同前 2001：170）。また両再版の所見本では落丁、乱丁が見られた。1987年版においては、第4章第7項目の26・27番の一部（同前 1945：129）がそれぞれ脱落し、残りが26番として合体された（同前 1987：55）。第5章第1項目の19番（同前 1945：144）が抜けている（同前 1987：60）。また数字が2ヶ所違っている<sup>4)</sup>。そして意味が変更されないのを前提として、言葉を変えて表現したり、ある文字を消したり、前後の文字を入り変えたりした部分も見られた<sup>5)</sup>。2001年版においては、第4章第5項目の29・30番（同前 1945：113）が抜けている（同前 2001：56）。また2ヶ所乱丁があり<sup>6)</sup>、1ヶ所数字が違っている<sup>7)</sup>。しかし、両再版において内容の改変はほとんど認められなかった。初版の主旨を忠実に伝えようとしたことが推測できよう。

なお、2001年版では元国会議員トグトホ（2000-2003年在任）による著者サムボーの紹介（同前 3）と、元農牧省大臣ナランザルガルが執筆した再版への前書きが加わっている（同前 9）。さらにサムボーの写真1枚（同前 2）と、彼の直筆一頁が載せられている（同前 6）。

『牧業者への助言』は遊牧技術の専門書といわれるほど、多岐にわたる内容が盛り込まれている。最も注目されるのは、地理的にモンゴルが3地域に区分される慣行にもとづき、3地域それぞれの遊牧について検討した点である。

モンゴルでは季節の極端な移り変わり、地形、土壌、降水量などの自然条件によって、北から高山帯、山岳森林帯（またはタイガ帯）、森林草原帯（または森林ステップ）へと次々変化し、さらに南下すると純草原帯（またはステップ）、砂漠性草原帯（または砂漠ステップ）、そして砂漠が現れる。これらの植物帯は、『牧業者への助言』において oi-tu keger-e

(森林ステップ), keger-e (ステップ) と cöl buyu jarimduy cöl keger-e (荒野あるいは半荒野) というように、3つの自然地帯として総合されている。この3つの自然地帯を基準とし、モンゴルはハンガイ (qangyai 山岳地帯の意味), ゴビ (yobi 不毛の地の意味), ヘールタル (keger-e tal-a 平原の意味) の3地域 (以下「自然の3地域」と略す) に区分される。

ハンガイ地域は高山帯、山岳森林帯、森林草原帯の、3つの植物帯からなる。そこにはモンゴル・アルタイ山脈、ハンガイ山脈、ヘンティ山脈、フブスグル山岳地域などが含まれ、河川が多く、水源が豊富で、恵まれた自然環境が備わっている。その広がりは全土の32%を占める。ゴビ地域は砂漠性草原帯、砂漠帯の2つの植物帯からなり、国土の約42%にわたる。年間降水量が100ミリを下回り、しかも川、湖も少ない。ハンガイに比べると、格段に厳しい環境になっている。そしてヘールタル地域は前述の2つの地域の間に位置し、純草原帯とほぼ一致する。その北部はハンガイ地域の自然に近く、南部はゴビ地域の特徴を帯びている。

こうした自然の3地域の特徴はモンゴル遊牧民の生活にも反映している。三秋尚によれば、ハンガイ地域では遠く移動することが少なく、山岳の高い所から徐々に降りて移動する。夏は登り、冬は降りるというように山を上下に移動する。ゴビ地域では夏に豊かな植生の山岳の高い所で過ごし、冬はゴビや平原の寒風を避けられる場所が選ばれる。ヘールタル地域では、南北間の緯度の差を利用して移動するという (三秋 1996: 85)。このように、3地域においては、多彩な自然環境に応じたモンゴルの遊牧が展開されている。ゴビはラクダとヤギの住地であり、ハンガイにはウシが多く、ヒツジとウマは全土に広がる傾向が窺えるなど、その自然と家畜の適性が示されている。

自然の3地域という区分はいまでもモンゴルで重視されている。自然条件、地理的な特徴、放牧地の面積、家畜頭数などに配慮し、自立的地域発

展をはかろうとした「モンゴル国地域発展政策」<sup>8)</sup>が2001年に国会で承認された。それによると、全国的に西部、ハンガイ部、中央部、東部の4部が再構築されるという。つまり再構築された各部はハンガイ、ゴビ、ヘルタル3地域の特徴を持つ自然をそれぞれ含むことになる。このことから自然の3地域はいかに重要な意味を持つのが理解できるだろう。

『牧業者への助言』は遊牧生活の各場面で応用できる内容を備えている。第3-4、6-8章ではハンガイ、ヘルタル、ゴビ地域それぞれにおける、冬・春、夏・秋の寒・暖季節別の五畜ごとの放牧、季節に応じた放牧地選定、家畜交配・出産、子畜育成、去勢などの労働が細かく示されている。第9-11章では自然の3地域における家畜囲いや小屋、井戸、干し草、ソーダ（家畜に不可欠な塩分）などの準備が必要だというようなことが記述されている。第12、14-15章では干ばつ、ゾド（jud、モンゴル独特の自然災害を指す）などの自然災害から家畜を守って越冬する工夫が強調されている。残りの各章では五畜の乳、毛皮・皮革、毛、柔毛などの加工・利用、大型家畜の使役、騎乗・運搬の道具作り、旅、逸走した家畜の搜索、オオカミ狩り、家畜病気の予防、フェルト（isegei、ヒツジの毛を圧縮して作る）作り、ゲル（ger、家の意味）の建て方、子育て、植物の利用、食肉の準備、干し肉作り、イヌを飼う方法などが取り上げられている。いわば『牧業者への助言』の内容はモンゴルにおける遊牧生活の全体像を総合的に示したものである。前述の『ト・ワンの教え』にも遊牧については、放牧地の利用、放牧の仕方、干ばつ、雪害への具体的な対策など、当時の遊牧生活全般にわたって日常の細かな注意事項が簡略に記されている（小貫1993：66）。『牧業者への助言』の内容と類似する点を多く取り上げていることが分かる。

こうして『牧業者への助言』では、遊牧現場における多様な牧畜作業について牧民がどのような点に、どこまで注意を払っているのか、具体的か

つ詳細に示され、さらにその有用性が同書の再版を通し、体制を越えて今日まで伝承されているのである。

### 3 牧民時代のサムボー

以上、『牧業者への助言』の内容を紹介し、モンゴルの遊牧生活について理解を深めたが、つぎに牧民時代のサムボーの伝記を見てみることにする。

#### ① 父親よりの教え

サムボーはモンゴルが封建体制から社会主義体制へと変る複雑な時局の中で牧民時を過ごした。封建体制のもとでは、すべての牧民が聖俗両勢力の隷属民とされ、厳しく管理されていた。彼らは封建勢力へ徴税を納め、兵役に就き、馱運を維持するなどの義務を負い、家畜財産が搾取される苦しい生活に喘いでいた。サムボー一家の生活も大変貧しく、サムボーは夏・秋の季節に短いズボンとシャツを着用し、靴はなく、裸足で暮らし、冬は古い毛皮のデール（debel、モンゴルの伝統的な長い服）一着のみで過ごしていた。しかしサムボー一家は頭数こそ少ないものの、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ラクダの五畜を所有して放牧する伝統的な遊牧生活を営んでいたのである。

サムボーは両親のもとでモンゴル遊牧民のごく普通の子どもとして育つ。幼い頃からすでに両親の教えを受け、牧畜労働を手伝いはじめる。6歳になると、夏はゲルの近くの放牧地で、当歳ヒツジや当歳ウシなどの幼い子畜を放牧した。また家畜囲いを掃除したり、季節が暖かくなると、アルガル（aryal、燃料にするためのウシの乾燥した糞）や燃料を拾ったりした。7、8歳の頃はヒツジ・ヤギの放牧を担当できるようになった。冬・春の季節に、オオカミを防ぐため番犬を連れて家畜放牧に出かける。家畜を放

牧しながらアルガルを拾う。夏になると乳搾りを手伝う。ヒツジ・ヤギの乳搾りをやっている様子がたまたま訪れた見知らぬ人に目撃され、お宅の子は女の子かと母が聞かれたことを知り、恥ずかしくなることもあったが、気にせずにもいつも努力していたため、近所の人々に「この子は口の福（ごちそうにありつく運）がある、大した子どもだ」といわれていた（Sükebayatur 2003：43）。

12歳になったサムボーに家畜放牧をもっと習熟させるため、両親は乗馬を身につけさせることを決めた。サムボーは自家の一番おとなしい黒っぽいウマに騎乗するが、ウマを恐れることがなく、右側、左側を問わず、乗ったり降りたりして、まもなく乗馬をマスターした。それまではいつも徒歩でヒツジ・ヤギを放牧していたが、ウマに乗れるようになると、行動する範囲が広がり、家畜の放牧も容易になった。

乗馬できるようになったサムボーはヒツジ・ヤギの放牧に加え、数頭のラクダを放牧しはじめた。ラクダの放牧はヒツジ・ヤギとは異なるため、父親にラクダの放牧地についても教わった。たとえば、ラクダには野原や窪地、低地のボタ（buta, *Artemisia caespitosa* Ldb）、ボトルガナ（buduryana, *Artemisia brachyloba* Franch）、フメリ（kümeli, *Allium mongolicum* Reg）、シラルジ（siralji, *Artemisia adamsii* Bess）、ユルフグ（yörkög, *Agropyron cristatum* [L.] Gaertn）などの牧草が多く混じった放牧地を主にあてがうが、寒くて涼しい日にはデレス（deresü, *Achnatherum splendens* [Trin] Nevski）のある、ソーダ性の低地へ導いて放牧するというような経験談である。サムボーも家畜に適する牧草を与えることの大切さを知り、『牧業者への助言』では五畜がそれぞれ独自に食べる牧草の名を数多く挙げている（Sambuu 1945：50-57）。

サムボーが家畜の放牧法を身につけることができたのは、父親よりの教えが重要な役割を果たしたのである。サムボーの父親は「このあたりでは

彼より優れた牧民はいない」といわれたぐらい、いつも近所の皆に褒め称えられる熟練した牧民であった（同前 1965：24）。サムボーの父親が放牧のやり方を教えるときは、まず家畜に対する関心を引き出し、観察力を身につけさせるように心がけていた。サムボーを毎日家畜の放牧に行かせるとともに、放牧から戻ってきたときは、一日中どんな特徴のある、何頭の家畜と出会ったのか、それらの毛色はどうだったのか、子畜を連れていたのか、どこへ行ったのかというように、詳しく尋ねるのであった。サムボーも日々このように聞かれるうちに、放牧中他人の家畜と出会ったら、徐々にその特徴を詳しく観察するようになっていった（Sükebaāatur 2003：145）。

父親の日々のやり方は、サムボーにとってそのまま素晴らしい模範であった。彼の父親は、その家畜がサムボー一家の家畜である、と近所の誰も一目で分かるぐらい特徴のある家畜を揃えているのである。ウシは黒っぽい毛、ヒツジは白毛のみか、目の周りの毛が黒い、ヤギは黒毛または白っぽい色、ラクダは黄色あるいは白毛、などの毛色の家畜がそれぞれ揃っている。その理由は父親によって詳しく教えられた。一つは畜産物利用に関わる理由である。ヒツジの毛色がばらばらであれば、ゲルの被いとなるフェルト作りには不向きであり、ヤギの色違いの毛で服が作られると保温はよくない、とさまざまに説明された（Sambuu 1965：24）。最も重視される理由の一つは、サムボー一家のような労働力が不足する家にとってはとても大事なことなのだが、もし家畜が逸走し、捜し尋ねる場合は、地元の人々が毛色の特徴によって格別に注意をしてくれるからだという（同前 25）。

また父親はサムボーに家畜の放牧仕方についても細々と教えていた。まず家畜の放牧にとって牧草が一番大事だと教えるとともに、家畜に最も適する牧草を詳しく説明していった。「どの種の家畜がどの牧草を好むのか、その実物の牧草を持ってきて、自分の子どもの手に持たせ、牧草の名前、

どこでより豊かに生えるのかを細かく教えていた」と元国会議員トグトホは語っている（同前 2001：3）。

それからサムボーの父親は、冬・春の季節は母畜の出産を控え、決して油断してはならない季節であると強調しながら、家畜妊娠期の放牧と出産期の育成について細々とした配慮を教えた。サムボーもそれが家畜の繁殖に重要であることを十分に認識し、それぞれの注意点をしっかりと覚えたのである。冬の月が始まってまもなく、牝家畜の腹が大きくなると、サムボーは父親の教え通りに妊娠した家畜を慎重に放牧した。1911年3月、サムボー一家はヒツジ・ヤギの出産期を迎えた。その時は、朝から晩まで母畜と当歳子畜の世話にかかりきりであった。生まれたばかりの子畜と母畜は寒さに弱く、特に注意を払わないと、簡単に死んでしまう。サムボーは両親に教わったさまざまな注意点をよく頭において熱心に働いた。当歳ヒツジの育成について『牧業者への助言』では48項にも及ぶ要点が挙げられている（同前 1945：199-208）。

サムボーは父親の教え通りに、ヒツジ・ヤギの出産や子畜の育成に積極的に関わり、また冬の季節におけるウマの日常的な取り扱いも学んだ。サムボーの父親はウマの群を日中は野原の放牧地へ放牧し、太陽が沈み薄暗くなる前に、ウマがゲルの方向へ自発的にゆっくりと近づき、しかも深夜から星が西方へ傾くまで冬営地から離れないように慣らしたのである。そうすると、日中に騎乗したウマを群に合流させたり、明日用いるウマを夜のうちに捕まえ、脚枷をはめて置いたりする必要が全くなかった。そして夜明けの頃、放牧されたウマの群へ向い、最もおとなしいウマを捕まえて日中騎乗するのである。このようにサムボーは父親のやり方を覚え、日常に騎乗するウマの取り扱いを身につけた。そしてウマの冬の放牧も行なった。日中はウマの群の密集した状態を保ち、よりよい牧草地へ導いて落ち着かせる。雪が積もっていても、一定の時間に井戸の水を飲ませ、1週間



に1度ソーダをやる。このようなやり方で放牧するため「わが家のウマの群は近所のウマの群より、体力づくりがずっとよくて力強かった」とサムボーは回想している（同前 1965：25）。

こうしてサムボーは幼い時から父親の教えのもと、季節に応じてヒツジ・ヤギ、ラクダ、ウマを放牧し、それぞれの習性をよく把握したうえ、牧草、天気、風、地形などの諸要素を配慮し、適当な放牧地をそれぞれあてがうなど、家畜放牧や管理についての知識を増やしていったのである。

## ② サムボーの経験の深まり

サムボーの幼い頃は、封建勢力の牧民への搾取が次第に激しさを増してゆく時期であった。当時のモンゴルにおいて遊牧は唯一の経済部門であり、人口の10%に満たない封建勢力が全家畜の40%以上を所有し、人口の90%以上を占める普通の牧民は50%の家畜しか持たなかった（Laqamsüring 1985：35）。領主は多くの家畜を持ち、自分の畜群を領内の隷属民に賦役として飼養させていた。牧民は領主に対して賦役を負い、少数の家畜で、貧しい生活を強いられていた。サムボー一家は、トシェート・ハン盟ゴビ・トシヤ・ゲン旗の補佐台吉<sup>9)</sup>の隷属民であり、年ごとに領主の家畜を放牧する賦役を負わされていた（Sambu 1965：15）。

1908年、13歳だったサムボーは領主に呼ばれ、彼のヒツジ・ヤギの大群を放牧させられた。それからほとんど毎年、短くても3ヶ月間、長ければ9ヶ月間も領主の家畜放牧を担当するようになり、その状態はモンゴル革命が勃発するまで続いたのである。

領主に呼ばれたサムボーはまだ年少なので、もっぱらヒツジ・ヤギの放牧、しかも暖かい季節の放牧を担当するように命じられた。サムボーは自家の家畜頭数以上の群を放牧したことがなかったため、最初もう一人のヒツジ飼いの老翁と一緒にヒツジ・ヤギを放牧した（同前 18）。その老翁

からは曇った涼しい日にはヒツジを谷間や川沿いの沃地、山の南側で放牧し、太陽が照りつける暑い日は丘や高い場所に放牧すれば、ヒツジ・ヤギがよく落ち着くと教えられた。二人は毎朝ヒツジ・ヤギをよい放牧地に出し、正午になると一時的に囲いへ追い戻し、乳搾りを済ませてしばらく休ませた。そして正午が過ぎると再び別の放牧地へ移って放牧した。そうすると母畜の乳の量が増し、ヒツジもよく太った。毎日の天候に配慮して放牧地を選ぶなど、ヒツジ・ヤギの夏・秋の放牧に関する知識は『牧業者への助言』にも十分に反映されている（同前 1945：105-114）。

やがて夏が終り秋になったが、領主にはサムボーを家に帰すという意味が全くなかった。サムボーは引き続きヒツジ・ヤギの秋の放牧を担当させられた。領主や彼の夫人は、秋の季節は家畜にとって、冬越しに備え体力づくりをするのに最も重要な時期であるとサムボーに言いつけ、もっとうまく放牧するように命じた。その言いつけに応じてサムボーはヒツジ・ヤギの体力づくりのため、太陽が昇る頃にヒツジ・ヤギを遠くの放牧地へ連れて行き、より栄養のある牧草を食べさせた。正午になる前は井戸の水を飲ませて別の放牧地へ移って放牧し、正午が過ぎると野原へ出してしばらく休ませて再び放牧した。そして夕方太陽が沈む前に囲いへ連れ戻すという放牧のパターンを毎日繰り返し、ヒツジ・ヤギの秋の放牧に精一杯努力した。領主は秋のヒツジ・ヤギの放牧をよくこなしたからと、サムボーに褒美の紙と筆を与えた（同前 1965：22）。サムボーのヒツジ・ヤギを放牧した成果が認められたわけである。

冬の月が始まると、領主の夫人はサムボーの代わりにほかの青年にヒツジ・ヤギの冬の放牧を担当させることにした（同前）。それはサムボーがまだ13歳の子どものもので、経験が少なく、冬の放牧に慣れていなかったからと考えられる。

こうして領主のヒツジ・ヤギの放牧から解放され、家に戻ったサムボー

は、自家のヒツジ・ヤギの出産を迎え、子畜育成に念入りに働いていたが、再び領主に呼び戻されることとなる。戻ってみると、サムボーの代わりにヒツジ飼いとなった青年は、ラクダや2、3歳ウマを調教して騎乗に馴らす仕事にあたっていた。彼によって調教されたラクダや2、3歳ウマが少しおとなしくなってくると、領主はサムボーを乗らせ、ヒツジの放牧に行かせてラクダやウマを使役に馴れさせようとした。サムボーは完全に馴らしたとはいえないウマやラクダに騎乗し、2ヶ月間ヒツジ・ヤギの群を放牧した。サムボーはこの時のことを、調教中のラクダはきちんと歩かない、手綱になれない、寝転ぶと起きあがらない、頭を振ってヒツジを驚かせるなど、困ったことがよくあったと回想している（同前 32）。

この時、サムボーは騎乗に十分慣れていないラクダや2、3歳ウマに乗ったのだが、ヒツジの放牧がとても楽になったことを感じた。その前年の6ヶ月間徒歩で放牧していた頃よりずっと脚が楽になり、喉の渇きも抑えられた。サムボーは大型家畜の重要な役割を認識し、ペアを組んでいる青年が荒っぽいウマを調教する様子をよく観察し、そのやり方を覚えていったのである。

このようにサムボーは家畜放牧に専念するとともに、近所の人々と協力し、毛を叩いてフェルトを作る、牝ウマを捕まえて乳搾りをする、当歳ヒツジ・当歳ヤギを対象として委託を受けて放牧する、井戸を掘ったり修理したりする、生活必需品の調達や狩りに出かける、いくつかの世帯のウマを一つの群として合流させてオトル otor に行かせて冬越しに備えるなど、さまざまな牧畜作業を体験し、遊牧生活の多岐にわたる知識を蓄積していったのである（同前 31）。なおオトルとは、牧民の男性が一部の家畜を連れて、冬の季節に備えて牧草を飽食させるなどの目的で一時的に別の場所へ移動することをいう。

さて、清朝崩壊後、モンゴルにはジェブツンダムバ・ホトクトを元首と

する活仏君主制政權が樹立された。牧民には清朝に対する賦役と同様に活仏君主の賦役が課せられた。その賦役のうち、牧民に加重となる負担は駅逓の勤務であった。当時のモンゴルにおいては、ウマ、ラクダ、ウシによる運輸が一般的であった。イヘ・フレー（庫倫とも呼ばれ、1924年にウランバートルと改められた）から四方へ放射状に伸びる駅逓網が重要な役目を果たしていた。この駅逓の歴史は古く、13世紀に広大なモンゴル帝国の情報システムとしてはじまり、地方へ通じる道路上には数十キロごとに駅が配置され、ウマの速度を利用して情報が伝達されたのである。数多くの駅逓は地元の牧民によって維持され、牧民は駅逓が必要とされるウマ、ゲル、食糧、燃料などのすべてを負担するのであった。活仏君主制時代に至っても、駅逓維持のため、牧民の家畜財産が搾取され、生活が圧迫されていた。

イヘ・フレーには全国各地へ伸びる諸街道の始発駅として置かれたトメト駅逓があった。1912年、サムボー一家はトメト駅逓の賦役に当てられ、サムボーは6ヶ月間そこで御者の任務にあたった（同前 63）。トメト駅逓の主な仕事は、活仏君主制政府の内務、外務、軍事、大蔵、法務5つの省の官吏たちが移動する際に騎乗するウマを提供することだった。そのうちサムボーは、大蔵省の大臣、次官、会計、書記など、多くの人々が騎乗するウマを提供する仕事を担当したのである。朝の太陽が昇る頃には各官吏の家を訪れ、多くのウマを届け、夜にウマを連れ戻してよい放牧地へ行かせる。しかし自分勝手にウマを連れ帰ってはいけない、必ず騎乗した官吏の許可をもらわなければならないと厳しく注意された。もしその夜に雨が降ったり吹雪が激しくなったりしても、官吏の返事を彼らの家の外で待つしかなかった。暑さに焼かれ、寒さに凍え、飢えと渴きにさいなまれることもしょっちゅうであった。ウマを調整するときには、大臣や次官に、いつも大きく、均整がとれていて、温和な性格で、跑足で走るすばらしいウ

マを選び出さなければならなかった。トメト駅通の御者は官吏を恐れていたため、駅通へよいウマを提供するように賦役の牧民に厳しく要請したり、イヘ・フレーのウマの売買人から跑足で走る優れたウマを高い値段で買収して官吏に提供したりすることさえ少なくなかった。しかし官吏たちは、夜に他の官吏の家を廻り、騎乗したウマを返さないばかりか、食べ物や飲み水もきちんと与えず酷使していた。そのため、駅通のウマの多くが痩せ衰えていた（同前 65）。

さらにトメト駅通は、5つの省から各盟長へ伝達する公文書を次の駅通まで配達する義務も負っていた。そのためトメト駅通は数百頭のウマを所有し、特に冬・春の厳寒期においてウマの飼養が大変だった。ハルハ4盟<sup>10)</sup>の内では、御者の仕事が一番苛酷な駅通として有名であった（同前 66）。サムボーはトメト駅通でのウマの使役を経験し、日頃の放牧や飼養の重要さを改めて認識した。

御者の義務を終えたあと、サムボーは初めての旅に出る。モンゴルの広大な土地においては、人口が少ないうえに散居していることから、交通の便が悪く、牧民の生活用品調達は牧民自ら当たらなければならなかった。そのため牧民は近所の人と組んで、年に何回か買い出しの旅に出かける。それは牧民の生活にとって欠かせない重要な行動の1つであり、一ヶ月間かかるのはごく一般的で、旅人と使役家畜にとって試練ともなる。

1914年の冬、サムボーは生活必需品を調達するため旅に出た。経験のある地元の知り合いと一緒に出かけたにもかかわらず、途中吹雪のためサムボーは迷子になった。一行から取り残されたうえ、オオカミの群に出会って命を落とす危険にも遭遇した。この時は幸いに旅先の家に助けられ、無事に家へ戻ることができた。「あの時オオカミに出会ったことを思い出すと、今も体が震える」とサムボーは回想している（同前 80）。

サムボーは1922年にもう一度旅をする。今回の旅は家畜の毛皮を売って

生計の足しにするためだった。サムボーは自家の3頭のラクダに毛皮を積み、近所の牧民と一緒に出かけた。毛皮を売って、穀物、粉などを購入し、ラクダにたっぷり積んだ。もし荷物がさらに増えたら、騎乗しているラクダに積もうと考え、自分が乗るための一頭の痩せたウマを購入した。また袋半分のエンドウを買って、それを少しずつ水に浸して毎日そのウマに与えた。そうすると、ウマは日々体力が回復して乗れるようになってきた。帰り道で、サムボーは荷駄を積んだラクダが疲れると、最初に自分が騎乗してきたラクダに荷駄を積み替え、ラクダを交替して休ませながら、1ヶ月かかってやっと家に着いた。しかし旅に連れて行ったラクダは体力を消耗しすぎて死んでしまった（同前 116）。旅行中、荷駄積みのラクダを交替して休ませ、十分な配慮をしたにもかかわらず、旅に出たラクダは死亡したのである。

こうしてサムボーはトメト駅通のウマの酷使による損失と、旅に伴ったラクダの死亡などを経験し、大型家畜の取り扱いの重要性を改めて学んだ。『牧業者への助言』において、ウマやラクダの扱いに関する調教、歩き方、馬具や道具などについての注意が細部にわたって述べられているのは、この時の経験からであろう。

旅を経験したあと、サムボーは自家の家畜を放牧したり、また近所の人々と協力して新しい井戸を掘ったり、古い井戸を修理したりする、フェルトを作る、家畜を秋のオトルへ行かせる、逸走した家畜を搜索する、牝ウマを捕まえて乳搾りをする、荒っばいウマを調教するなど、さまざまな牧畜労働についてさらに体験を積み重ね、モンゴルにおける遊牧生活について相当に詳しくなった（同前 77）。元人民大会幹部会秘書長ゴトブ（1964-90年在任）は「モンゴル遊牧生活の伝統に詳しい人はサムボーにおいて、誰ひとりいない」と評価しているほどである（Sükebayatur 2003:95）。

このようにサムボーは、幼い頃から遊牧現場で家畜放牧をはじめとする

さまざまな牧畜作業を繰り返し実践するとともに、両親や近所の老翁などの人々に家畜の扱い方を教わり、さらに近隣の人々と協力して行う数多い牧畜労働の経験を積み重ね、牧民としての諸能力を向上させていったのである。

#### 4 牧民の遊牧知識や技術の習得

上述したところから、牧民時代のサムボーの伝記を通じて、彼が一人前の牧民へと成長してゆく過程が明らかになった。つぎにサムボーの遊牧現場での経験を検討し、牧民が知るべき知識をどのように習得していったのかを考察する。

サムボーは6歳になると、両親の指示にしたがって子畜を放牧し、7、8歳の頃はいろいろな牧畜労働を担当した。さらに成長するにつれて、ヒツジ・ヤギの放牧に加え、ウマやラクダを放牧するなど、だんだん担当できる家畜の種類を増やしていった。牧民の子どもが大人たちを手伝うのは、今日の遊牧現場でもよく見られる光景である。三秋は子どもたちが牧畜労働を手伝う様子を次のように報告している。ハンガイ地域のザブハン県の6歳児は、夏から子ヒツジ13頭をゲルの近く草原に誘導することを覚え、食器洗いや水汲みも手伝う。同地域にあるボルガン県の12歳の少年は、ヒツジ250頭の群をゲルから6キロ離れた草原に誘導し、夕日が落ちるまで見張る。ゴビ地域のバヤンホンゴル県の5歳児は、ヒツジの毛刈りやヤギの乳搾りを手伝うという（三秋 1991：204）。また三秋の調査では、子どもの親が「遊牧民の子どもは5歳でヤギやヒツジの放牧ができ、七歳になるとウシ、ラクダの放牧ができるから、心配は無用だ」と言いながら、7歳の子どものウシの放牧に行かせる例が紹介されている（同前 1995：175）。牧民は子どもが家畜放牧を担当することは当たり前だと考えていることが分かる。

ハンガイ地域で風戸真里が行なった調査では、13歳、15歳の少年たちがウマに乗って、ヒツジ・ヤギを放牧する際、ウマやラクダの放牧もともに行うことが注目されている（風戸 2009：105）。また季節的な牧畜労働においても十数歳の少年が主な労働力になったり、介添えしたりしている。夏になると五畜がいっせいに搾乳期に入るため、牧民にとって乳搾りは大きな負担となる。その時、16、17歳の少年が精一杯手伝っていたという（三秋 1991：75）。冬季のウマのオトルにも若者の働きが欠かせない。牧民が5世帯のウマを預かってオトルに出かけた。そこにはウマを預けた5世帯の若者が絶えず交代でやって来て、寝泊まりをしながら労働力となったという（風戸 2009：187）。調査を行なった両氏はともに牧民の子どもが欠かせない労働力であると指摘している。これらの子どもたちの行動は、約百年も前の異なる体制下において、少年時代のサムボーが牧畜労働を手伝っていた様子と共通している。『牧業者への助言』にも子どもの物心がつく様子や年齢にあわせ、担当できる牧畜労働を教える必要があると強調されている（Sambuu 1945：28）。牧民は幼少の頃より家畜を相手にして育ち、両親の労働を手伝うことによって、牧民としての第一歩を踏み出しはめるのである。このように牧民の子どもが成長する過程において、家畜とのつきあい方を覚えてゆくというやり方が、時代を越えて存在しているのである。

現在、モンゴルにおいて牧民の子どもは8歳になると学校教育を受ける。8年制や10年制の学校教育を終えた子どもは牧民になったり、ほかの職に就いたりする。就学前の子どもは、いつも家畜を相手にして遊びながらできる仕事を手伝う。学校に通う子どもたちは、放課後や夏・冬休みにいつも両親の手伝いをして、学校と遊牧現場の両面において教育を受けている。ところで、幼い頃のサムボーは学校教育をまったく受けなかった。学校さえ設置されていなかった当時のモンゴルの社会状況では、教育を受けるこ



となどありえなかったのである。書記に弟子入りして、モンゴル語の読み書きを勉強し、以後は自力で勉強を続けることができたサムボーは、実に幸運だったといえよう。彼の勤勉な様子を見た近所の人は「わがサムボーは知識人になる」と語っていたという（Sükebayatur 2003：44）。

サムボーの父親が彼に放牧のやり方を伝授していたように、今も牧民は子どもたちに放牧のさまざまな技術を教えている。ゴビ地域で調査を行なった三秋は、親が7歳の子どもをウシの放牧に行かせる様子を次のように述べている。親は「牧地は南の高い山ではなく、東の小溪谷沿いの山すそにし、あまり遠くへ行かないように」と具体的な指示をしている。子どもは父親のひとことひとことにうなずく。しかも下営している山岳地の地形や牧地の状況について、父親と話し合いが出来る基本的な知識を持っていることに驚いたという（三秋 1995：175）。また父親が夕方早く牧地からヒツジ・ヤギを連れて帰った息子を激しく叱る場面に出会ったことを述べている（同前 162）。子どもは、ヒツジ・ヤギの体力づくりのため、時間をかけて牧草をたくさん食べさせるという放牧のポイントを押さえなかったから怒られたのである。ハンガイ地域で調査を行なった風戸も、子どもに対する両親の教えを示し、15歳の少年と26歳の青年二人を比較して次のように指摘する。青年は経験豊富で、しかも世帯主として責任感を持って放牧に望んでいる。一方、15歳の少年はまだ経験が少ない。親は放牧の仕事を完全にこなすことができないと考え、頻繁に指示を出していた。少年は親の言いつけにしたがって放牧に随行しているという（風戸 2009：117）。子どもに対する両親からの伝授の必要性が強調されている。また子どもは、両親の教え通りに牧畜作業の体験を深めていくにつれて、多くの知識や技術を身につけるわけである。牧民親子の交流によって遊牧技術や知識が次世代へと伝わる伝統は、しっかりと保持されているといえよう。

少・青年期のサムボーは季節変化に応じて協同でこなす数多くの牧畜労

働をししばしば体験した。春の家畜出産期、夏の乳搾り、秋のオトル、冬のオトルなど、季節性が強い牧畜労働を協力して行なうのである。そのほか旅や狩猟、井戸掘り及び修理、フェルト作り、毛刈りなど、短時間に多くの労働力が必要とされる作業をも近所の人々と助けあって行なった。これらの共同労働は、今日牧民の年間生産歴における協同作業とほとんど一致するのである。

厳しい自然条件のもとで、遊牧生活を営んでゆくには助けあうことは不可欠である。サムボーは領主のもとで苛酷な労役提供を強いられたのだが、その労役提供はある意味で遊牧社会における協力互助の必要性を示したとも見ることができよう。今日も牧民は互助関係で結ばれ、彼らの間では労働力の集中及び合理的な配置、省力化を目的とした共同作業が継承されている。民主化以降、各地で行われた調査では、近隣する牧民が協力していることが指摘されている。2005年にハンガイ地域のウブルハンガイ県で風戸が行なった調査によると、いくつかの牧民世帯が家畜を種ごとにまとめ、世帯を単位として当番制で家畜放牧に協力し、夜にはヒツジ・ヤギを入れる単一の家畜囲いを利用するという（同前 2006：16）。また短時間に大量の労働力を必要とする労働には近隣する世帯が集まる。たとえば、ヒツジ・ヤギの搾乳期や、冬・春営地における家畜囲いの設置などの際である（同前）。

ヘルタル地域のトゥブ県で日野千草が行なった1998年の調査によると、近隣する牧民世帯はヒツジを1つの群にまとめ、その放牧を当番制で行なう。また毛刈り、乳搾り、移動など、季節的な労働を協同で行なっているという（日野 2001：98）。また同地域のスフバートル県で尾崎孝宏が行なった1997年の調査によると、牧民が息子2人、娘婿2人の5世帯で協力し、ウマ130頭、ウシ250頭、ヒツジ・ヤギ1200頭、ラクダ10頭を管理しているという（尾崎 1997：93）。三秋は1995年にゴビ地域のバヤンホンゴ

## サムボーとその著作『牧業者への助言』

ル県ボグド郡で住み込み調査を行なった。その時の聞き取りによると、近隣の牧民世帯は毎日家畜の放牧を交代で行ない、ほかの作業も共同で行なって助け合うという（三秋 1995：24）。『牧業者への助言』でも、近隣の人々が協力して行なうさまざまな牧畜作業に言及しており、労働節約の必要性が提唱されている。たとえば移動（Sambuu 1945：33）、ヒツジ・ヤギの出産期（同前 71）、ウマの冬の放牧（同前 78, 87）、井戸掘り（同前 151）、子畜育成（同前 205）、毛刈り（同前 295）、オオカミ狩り（同前 349）などの際である。遊牧生活の各場面で近隣する牧民が協力することによって、労働が集約されるとともに、多様な牧畜労働の仕方、さらに衣・食・住生活の広い範囲にわたる知恵などが交流され、牧民の間に共有されているのである。

このように父親や老輩よりの伝授、近所の人々との交流、協力互助を通じて、遊牧生活を営むための知恵や技術が遊牧民の間で共用され、さらに次世代へと伝承されてゆくことが、体制の違いを越えて共通しているのである。

## お わ り に

以上、政治家と牧民の両側面から、サムボーという人物の遊牧に対する貢献を検討してきた。20世紀の激しく変化する社会政治のもと、モンゴル遊牧民は遊牧社会の互助関係に支えられ、幼いときから両親の教え、近隣する人々との交流を通じ、さらに現場での実践を積み重ね、厳しい自然のなかで遊牧生活を維持してゆく知識や技術を習得していった。しかも牧民は遊牧の知識や技術を次世代へと伝える重要な役割を担ってきたことが明らかになった。

サムボーが一人前の牧民へと成長する過程は、今日の牧民と共通する点が多い。しかし一般の牧民に比べ、サムボーの場合は政治家としての経歴

が極めて異例なものと感じられる。サムボーは遊牧に対して深く注意を払い、政府の要職に就きながら遊牧の知識や技術を著作として書きとどめ、さらに多くの牧民へと伝授しようとした。『牧業者への助言』を通じて、自分も遊牧生活を熟知していることを示し、多くの牧民に共感をもたらしただけであり、この恩恵は現在に至るまで享受されている。

特に1999-2001年に自然災害に見舞われ、牧民が遊牧の知識や技術の欠乏、経験の不足などの問題に直面した際、『牧業者への助言』が再版されたことから、その事は窺える。半世紀以上を経た今日でもこの著作の有用性は、すこしも減じていないのである。これから約32万人の牧民は社会変化に対応しながら、3600万頭余りの家畜を世話して行かなければならない。自然の3地域においてどのような遊牧を行うのかということについては、『牧業者への助言』で提唱されている点が改めて見直されるべきである。たとえば、自然の3地域それぞれにできるだけ五畜を揃えて放牧し、モンゴルの多彩な自然環境を多面的に利用する。また地域別に言及された季節変化による移動の回数をもとに移動を行い、放牧地を合理的に使用すれば、過放牧を避けることも可能になる。そして地域別に示されたゾドへの対処が牧民にうまく扱われ、自然災害を乗り越えることができるなどの点である。

いうまでもなく、厳しい自然のもとで遊牧を営むのは、牧民一人一人の熟練した技術にかかっている。遊牧生活の知恵や放牧技術はサムボーを含む多くの経験豊富な牧民の粘り強い努力によって伝承されてきた。またそれらは多くの牧民によって遊牧現場で繰り返し実践され、今日に至っている。牧民の間で技術の伝授、情報の交換によって、遊牧に関するさまざまな知識や技術が共有され、さらに遊牧を円滑に進める経験が深まり、牧民個人の諸能力が向上されてきたのである。

一方、サムボーの遊牧に対する貢献が社会主義時代及び民主化以降も高

## サムボーとその著作『牧業者への助言』

い評価を得たのは、政府が国民経済における遊牧経済の重要性を認識し、その発展をはかろうとした方針の現れでもある。牧民支援、遊牧保護施策のもと、自然の3地域それぞれの特徴を活かした牧畜生産や経営を促すことが可能になり、さらに、それを遊牧社会の根底に据えることによって、自立した地域発展の基盤が確立されるだろう。

本稿は2009年度桃山学院大学大学院文学研究科博士学位論文の一部であり、『牧業者への助言』の著者サムボーの牧民時代の伝記を通じて、モンゴル遊牧生活における多岐にわたる知識や技術が体得・活用される有様を明らかにしたものである。今後、『牧業者への助言』が作られるに至った経緯や、その具体的記述が現代の遊牧現場でどのように伝承されているのか、などの課題を解明してゆきたい。

なお、サムボーに関する研究としては、2010年には Mary Rossabi によるサムボーの自叙伝の英語訳 (*Herdsmen to Statesmen: The Autobiography of Jamsrangiin Sambuu of Mongolia*) が刊行されたことを付言しておく。同書の刊行時期が本論文完成後であったため言及することができなかったが、今後発表する予定のサムボーについての考察において適宜言及することになるだろう。

## 注

- 1) 人民大会は人民共和国の最高立法機関であり、3000-5000名に代表議員1名が選出される。その任期は3年である。通常会議は年に一回開かれ、国のさまざまな法律や内外政策の規則の決定、国民経済計画の審査承認などの多方面にわたる内容が議論される。人民大会が年一回だけ開催されるため、その常設機関として人民大会幹部会が設けられ、会議の召集、新法令の発布、官僚会議の決定・停止、大臣の任免、勲章や称号の授与などの権限を持つ。幹部会議長は人民大会の議事を指導し、その内部規則を管理する、と憲法に

定められている。

- 2) 清朝はモンゴルにおいては、旗を行政組織の基本単位とし、いくつかの旗をあわせて盟とする盟旗制度と呼ばれる支配制度を用いた。それは広大な地域に居住するモンゴル遊牧民を分割した状態に置くことによって、その結束や強大化を防ぐためであった。モンゴルの領土において当時4盟86旗が再編された。ザサクト・ハン、サイン・ノヨン・ハン、トシェート・ハン、チェチェン・ハン4盟である。
- 3) 「真実」という意味で、1920年にモンゴル人民革命党の機関紙として刊行された。
- 4) 所見の1987年版では、第7章第1項目13番の牝ラクダの妊娠期間13ヶ月15日（Sambuu 1945：169）が13ヶ月13日となり（同前 1987：69）、第2項目5番のハイガイ地域における牝ラクダの出産期3月十何日（同前 1945：170）が3月15日となっている（同前 1987：69）。
- 5) 1987年版では、第2章第3項目9番の「murui qaḡayai-yi tegsile」（傾いているのを直しなさい）部分（同前 1945：35）が、「qan-a-yin eres-i olju tegsile」（側壁をまっすぐ揃えて直しなさい）と変えられた（同前 1987：15）。また「ali, qamay, enekü, mön」（すべて、全部、これら、その）などの語が所々脱落している。
- 6) 所見の2001年版では、第2章第1項目の10-25番（同前 2001：16）は、26-27番、第2項目の1-8番（同前 15）との乱丁がある。また第14章第1項目の1-9番（同前 131）と、第2項目の1-7番（同前 132）との乱丁がある。
- 7) 2001年版では、第7章第2項目13番のゴビ地域におけるヒツジの妊娠期10月1日と、出産期3月5日（同前 1945：171）が、10月15日と、3月15日とそれぞれ記されている（同前 2001：83）。
- 8) <http://www.pmis.gov.mn>（モンゴル国政府事務局）Ulus-un yeke qural-un 2001 on-u 57 duḡar toyṭayal “mongṡol ulus-un büsečilegsen köḡjil-ün üjel barimṭalal”（国会2001年第57号決定「モンゴル国地域発展政策」）。
- 9) モンゴル語のタイジの漢字表記であり、清朝のモンゴル支配期におけるモンゴル王公貴族に対する爵位を指している。
- 10) 注2)を参照。活仏君主制時代には清朝のモンゴル支配期の行政区分が受

け継がれた。

## 参 考 文 献

日本文

尾崎孝宏 1997 「現代におけるホト・アイルの動態」『日本モンゴル学会紀要』  
28

小貫雅男 1993 『モンゴル現代史』山川出版社

岡洋樹 1997 「清代ハルハ・モンゴルの教訓書の一側面——プレヴジャヴ布  
告文を中心に——」『内陸アジア史研究』12

風戸真理 2006 「遊牧民の離合集散と世話のやける家畜たち——モンゴル国  
アルハンガイ県におけるヒツジ・ヤギの日帰り放牧をめぐる労働の組織化と  
群れ管理——」『アジア・アフリカ地域研究』6

——— 2009 『現代モンゴル遊牧民の民族誌——ポスト社会主義を生きる  
——』世界思想社

萩原守 1999 「『ト・ワンの教え』について——十九世紀ハルハ・モンゴル  
における遊牧生活の教訓書——」『国立民族学博物館研究報告別冊』20

日野千草 2001 「モンゴル遊牧地域における宿营地集団——モンゴル国中央  
県ブレン郡における事例から——」『リトルワールド研究報告』17

三秋尚 1991 『大草原の声が聴こえてくる——モンゴル草原の旅から——』  
鉾脈社

——— 1995 『モンゴル遊牧の四季——ゴビ地方遊牧民の生活誌——』鉾  
脈社

——— 1996 「モンゴル遊牧の生産・生活技術——ゴビ地域山岳部におけ  
る野外調査から——」『畜産の研究』50-2

ラティモア・オウエン著、磯野富士子訳 1966 『モンゴル——遊牧民と人民  
委員——』岩波書店

欧文・モンゴル文

Bolodbayatur 2004 *Qoriduyar jayun-u mongyol-un ulus törö-yin jidkülted*,  
Ulaanbaatur. (20世紀モンゴルの政治社会の功臣)

*Большая советская энциклопедия*, 1975・22.

*Far Eastern Economic Review*, 2001.5.31.

Laqamsüring 1985 *Mongʻol arad-un qubisqaltu nam-un tobči teüke*, Ulaanbaatur.

(モンゴル人民革命党史)

Mongʻol ulus-un ündüsün-ü statistiy-un qoriy-a 1998 *Mongʻol ulus-un statistiy-un emkidkel 1997 on*, Ulaanbaatur. (モンゴル国統計集1997年)

———— 2008 *Mongʻol ulus-un statistiy-un emkidkel 2007 on*, Ulaanbaatur. (モンゴル国統計集2007年)

———— 2012a *Mongʻol ulus-un statistiy-un emkidkel 2011 on*, Ulaanbaatur. (モンゴル国統計集2011年)

———— 2012b *Mongʻol ulus-un neigem ed-ün jäsar-un bayidal tanilčayuly-a 2012 on-u 6 sar-a-du*, Ulaanbaatur. (モンゴル国社会・経済状況解説2012年6月)

———— 2012c *Statistiy-un bulleteni 2012 on-u 6 sar-a*, Ulaanbaatur. (統計公報2012年6月)

*Mongʻol-un neberkei toli* 2000, Ulaanbaatur. (モンゴル大百科事典)

Mary Rossabi; Morris Rossabi 2010 *Herdsman to Statesman: The Autobiography of Jamsrangiin Sambuu of Mongolia*, Rowman and Littlefield Publishers, Inc.

Sambuu 1935 *Arad-un negüdel-ün mal aju aqui-yi sayijirayulun kögjigölküi aradčilaltu ar-y-a mayiy-un sedüib*, Ulaanbaatur. (牧民の遊牧経済の改善をめぐる民主的なやり方を課題として)

———— 1937 *Malčid-un tursily-a*, Ulaanbaatur. (牧民の経験)

———— 1945 *Mal aju aqui deger-e-ben yajakıju afillaqu tuqai arad-tu ögküi sanauly-a suryal*, [1987 (再版), 2001 (再版)], Ulaanbaatur. (牧畜経済においてどのように働くのかについて牧民に与える助言)

———— 1956 *Malčid-tu ögküi jöblelge*, Ulaanbaatur. (牧民への提言)

———— 1965 *Amidural-un jamnal-ača* [duradqal] degedü, Ulaanbaatur. (生活の経歴より——回想録1——)

———— 1970 *Amidural-un jamnal-ača* [duradqal] ded, Ulaanbaatur. (生活の経歴より——回想録2——)

———— 2005 *Uqayalaqu tutum uqayaran-a*, Ulaanbaatur. (宣伝すればするほど見識が広がる)



サムボーとその著作『牧業者への助言』

Sükebaāatur 2003 *Mongγol törö-yin mergen ebüge*, Ulaγanbayatur. (モンゴル政権の聡明な老翁)

*Ünen* 1972/5/23 *Ĵamsaran-u Sambuu*. (ザムサランノ・サムボー)

———— 1972/5/25a *Čedenbel-ün kelegsen üge*. (ツェデンバルの発言)

———— 1972/5/25b *Poriyanèiki-yin kelegsen üge*. (プリヤンチェキの発言)

———— 2007/11/N40 *Ĵamsaran-u Sambuu-yin kösiy-e bosqaba*. (ザムサランノ・サムボーの像が立てられた)

附録1 サムボーに関する年表

西暦	事 項
1895	6月27日清朝トシェート・ハン盟ゴビ・トシヤ・ゲン旗に生まれた。
1908	書記に徒弟入りして、モンゴル語読み書きの勉強をはじめた。
1912	イヘ・フレーのトメト駅通に勤務した。
1920	印務処の見習い書記になった。
1921	モンゴル人民革命党に入党した。
1923	大蔵省書記になった。
1924	大蔵省3級会計に昇進し、モンゴル人民革命党第3回党大会代表として選出された。
1926	大蔵省1級会計主管に就任した。
1927	大蔵省主管に就任した。
1929	アルハンガイ県封建階級財産没収を実行した。
1930	トゥブ県知事に就任した。
1931	エムヌゴビ県知事に就任した。
1932	エムヌゴビ県裁判長を兼任した。
1934	モンゴル人民革命党第4回党大会代表として選出され、牧農省部長に就任した。
1937	駐在ソ連特命全権大使に就任した。
1942	ソ連への援助『革命モンゴル』戦車隊を組織した。
1945	『牧業者への助言』が出版された。
1946	外務省東方部長に就任した。
1950	駐在朝鮮民主主義人民共和国特命全権大使に就任した。
1951	外務省代理大臣に就任した。
1952	スターリンのモンゴル訪問活動に参加した。
1953	ソ連・モンゴル文化交流協会代理会長に委任された。
1954	人民大会幹部会議長に選出された。
1956	『牧民への提案』が出版された。
1957	人民大会第3回選挙で幹部会議長に再選出された。
1958	モンゴル人民革命党第13回党大会中央委政治局入りした。
1960	人民大会第4回選挙で幹部会議長に再選出された。
1961	モンゴル人民革命党第14回党大会中央委政治局入りした。
1963	人民大会第5回選挙で幹部会議長に再選出された。
1965	『生活の経歴より——回想録1——』が出版された。
1966	人民大会第6回選挙で幹部会議長に再選出された。モンゴル人民革命党第15回党大会中央委政治局入りした。
1970	人民大会第7回選挙で幹部会議長に再選出され、『生活の経歴より——回想録2——』が出版された。
1971	モンゴル人民革命党第16回党大会中央委政治局入りした。
1972	5月20-21日 死去した。
1985	生誕90周年記念活動がトゥブ県に開催された。
1995	生誕100周年記念活動がトゥブ県に開催された。
2002	牧民を支援するJ・サムボー基金が設立された。

## サムボーとその著作『牧業者への助言』

### 附録2 サムボーの人民大会幹部会議長だった時期の活動

1954	6月	人民大会第2回選挙トゥブ県第82区代表選出	11月	の発言 モンゴル人民革命党中央委政治局入り
	10月	地方行政選挙に関するラジオ発言		
	11月	モンゴル人民革命党第12回党大会で		
1955	3月	人民大会第2回選挙第2集会での発言	7月	ベトナムへの援助を組織する委員長就任
	3月	産業組合先進分子第1回会議での発言	7月	優秀牧民全国第4回大会での発言
	5月	モンゴル人民革命党中央委第2回総会での発言	12月	モンゴル人民革命党中央委第3回総会での発言
	5月	トゥブ県への考察	12月	医師会工作第2回会議での発言
1956	4月	アルハンガイ県党全体会議出席	10月	消費者委員会第10回会議での発言
	5月	ウランバートル市五一労働者記念集会での発言	11月	10月革命39周年記念集会での発言
	7月	モンゴル朝鮮友好集会での発言	12月	ドンドゴビ県第5回党全体会議出席
1957	1月	新年ラジオ発言	7月	モンゴル人民革命党中央委第6回総会での発言
	3月	モンゴル人民革命党中央委第5回総会での発言	7月	ウブスハンガイ県革命青年同盟会議での発言
	4月	人民大会第2回選挙第4集会での発言	9月	インド大統領歓待会での発言
	4月	裁判・検察工作会議での発言	9月	社会主義諸国労働者代表会での発言
	6月	人民大会選挙デルゲル・ハンガイ区での発言	10月	10月革命40周年記念ラジオ発言
	6月	人民大会第3回選挙デルゲル・ハンガイ区代表選出	12月	モンゴル人民革命党中央委第7回総会出席・発言
1958	2月	牧畜業先進青年第1回集会での発言		授与会出席
	3月	モンゴル人民革命党第13回党大会での発言	9月	ドルノゴビ県党全体会議出席
	4月	ウランバートル市人民大会第5回集会での発言	10月	ビオネール会館開館式での発言
	5月	子どもを多く生んだ「有名な母」賞	11月	モンゴル人民革命党中央委第2回総会出席
			12月	青年同盟第8回会議での発言
1959	3月	モンゴル人民革命党中央委第3回総会での発言	11月	工業第5回会議出席
	5月	五一労働者記念集会での発言	11月	裁判長会議での発言
	7月	モンゴル・ポーランド友好集会での発言	12月	農牧業第2回会議での発言
	7月	十月革命42周年記念活動参加	12月	人民大会第3回選挙第4回集会での発言
1960	4月	ソ連への訪問	6月	人民大会第4回選挙大学14区代表選出
	4月	チェコスロヴァキア、ポーランドへの訪問	7月	人民革命39周年記念活動開催・発言
	5月	憲法修正委員会参加	11月	ソ連モンゴル領事館十月革命43周年記念活動参加
	5月	ウランバートル市党大会での発言		

国際文化論集 No47

	12月	カンボジア代表歓待会出席			
1961	1月	人民大会第4回選挙第2回集会での発言	7月	モンゴル・ポーランド友好集会での発言	
	3月	水利先進技術者第1回会での発言	7月	エムヌゴビ県成立30周年記念集会参加	
	5月	五一労働者記念集会での発言			
	5月	朝鮮への訪問	10月	ウランバートル市第76区選挙代表との会談	
	7月	モンゴル人民革命党第14回大会での発言	12月	家畜の冬越しをめぐるラジオ発言	
	7月	人民革命40周年記念活動開催・発言			
1962	1月	牧畜技術者先進牧民全国第2回会議での発言		会での発言	
			10月	トゥブ県への視察	
	1月	人民大会第4回選挙第3回集会出席	11月	10月革命45周年記念活動開催・発言	
	3月	ヘンティ県への視察	12月	ナルハイ炭鉱創立40周年記念集会参加	
	4月	ヘンティ県人民代表会議出席			
	9月	モンゴル人民革命党中央委第3回総			
1963	2月	人民大会第4回選挙第4回集会出席	10月	タルハン市への建築、水利、暖房設備設置考察	
	3月	トゥブ県第13回党全体会議での発言	11月	10月革命46周年記念集会での発言	
	5月	人民大会選挙第164区代表選出	11月	県市裁判指導工作会儀での発言	
	6月	ウブルハンガイ県の青年との面会	12月	モンゴル人民革命党中央委第5回総会出席	
	9月	トゥブ県への考察			
	6月	農牧経済大学卒業式での発言	12月	人民大会第5回選挙第2回集会での発言	
	7月	トゥブ県樹立40周年記念集会での発言	12月	獣医所設立40周年記念集会参加	
	8月	三県牧畜技術者会議参加	12月		
1964	1月	県市人民代表、党委書記長との会談		の発言	
	2月	ボルガン県第3回党全体会議での発言	11月	モンゴル人民共和国独立40周年記念集会での発言	
	3月	ドンドゴビ県、ウブルハンガイ県への考察	11月	ドルノゴビ県第4回党全体会議での発言	
	5月	ウブルハンガイ県第4回党全体会議での発言	12月	モンゴル人民革命党中央委第6回総会出席	
	7月	植物研究者代表との会談	12月	人民大会第5回選挙第4回集会出席	
	11月	ダルハン建築資材工場生産開始式で			
1965	1月	バヤンホンゴル県第5回党全体会議参加	8月	ウランバートル市第2回党員会議出席	
	2月	平和維持委員会、アジア・アフリカ協力連合第7回会議での発言	11月	スフバートル県第6回党代表会議参加	
	8月	トゥブ県優秀な狩人第2回集会での発言	12月	モンゴル人民革命党中央委第8回総会出席	
1966	2月	ヘンティ県第7回党全体会議参加	6月	人民大会第6回選挙アルタンボリグ区代表との会談	
	3月	モンゴル人民革命党結成45周年記念集会での発言	6月	人民大会第6回選挙第216区代表選出	
	5月	アルハンガイ県第13回党会参加			

サムボーとその著作『牧業者への助言』

			7 月	保育工作強化サムボー基金設立
1967	2 月	トゥブ県第 7 回人民代表選挙第 5 回集会参加	6 月	モンゴル人民革命党中央委第 3 回総会出席
	2 月	優秀教師表彰記念集会での発言	6 月	人民大会第 6 回選挙第 2 回集会出席
	3 月	国際学生連合第 11 回会議での発言	11 月	10 月革命 50 周年記念ソ連への訪問
1968	2 月	エムヌゴビ県への考察	9 月	モンゴル・ポーランド友好集会での発言
	5 月	ハンガリー国への訪問	12 月	モンゴル青年同盟第 13 回会議での発言
	6 月	人民大会第 6 回選挙第 3 回集会出席	12 月	モンゴル人民革命党中央委第 5 回総会出席
	6 月	ゴビ・アルタイ県家畜放牧宣伝活動参加		
	7 月	保育工作会議での発言		
1969	3 月	モンゴル人民革命党中央委第 6 回総会出席	7 月	モンゴル人民革命党中央委第 7 回総会出席
	4 月	世界平和 20 周年記念第 8 回会議での発言	8 月	ブルガリア『労働者』新聞のインタビュー
	5 月	モンゴル・ソ連友好集会での発言	9 月	ハルハ河戦勝利 30 周年記念集会参加
	6 月	人民大会第 7 回選挙第 226 区での発言	9 月	ブルガリア解放 25 周年記念集会参加

**Sambuu and his Book**  
*Advice to the Nomadic Herder*  
——A Study of the Nomadic Life in Mongolia——

Urenčeegeg

This paper considers Sambuu (1895-1972) and his widely-read work *Advice to the Nomadic Herder*, published in 1945 in the People's Republic of Mongolia, in which he sets out his proposals for the nomadic life.

In the early part of his life, Sambuu was a herdsman. He acquired a wide knowledge of nomadism including domestic animal pasturage through his personal experience as a nomad for more than 20 years. From 1930 he served as the Prefectural Governor of Tov and Omnogovi, as Ambassador to the Soviet Union, as Acting Minister of Foreign Affairs, and he was Chairman of the Presidium of the Great Khural for six consecutive quarters from 1954. At the same time, Sambuu left many books, including the masterpiece mentioned above, in which he wrote down his knowledge of nomadism and the skills he had acquired as a herder.

Despite changes in Mongolia's social system, Sambuu continues to enjoy a high evaluation, not only as a statesman, but also for his contribution to the nomadic economy.

The first part of this paper gives a brief summary of Sambuu's career as a statesman, and also introduces his book *Advice to the Nomadic Herder*. The second part analyzes Sambuu's biography of his days as a herdsman, and examines the process through which Mongolian nomadic herders grow to maturity. The paper shows the wide variety of knowledge and skills required for the nomadic life in Mongolia that are utilized and acquired by experience.